

対馬字引『日暮芥草』府中語抄

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2332953>

出版情報：文學研究. 40, pp.161-184, 1950-11-10. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



対馬字引『日暮芥草』府中語抄

吉 町 義 雄

大八洲の一でありながら本土よりも鶏林八道へ近い対馬に方言関係の稿本古書『日暮芥草』のあるのが自分に知れたのは漸く最近である。(1) 嚴原町の八幡宮神社(宮司櫻井清氏)を介して滝山政太郎翁の居所を知り、文通数回数ヶ月に互つて原物の体裁内容も先づ知悉し得たので此処に紹介する事とした。以下の掲載内容は高齢者が不遇の生活を押しして震へる手先に昔の抄出を副写され数次の外出御足労を以て調査されたペン細字書翰を整理したものであつて、茲に厚く謝意を表する次第である。

原書は対馬藩士なる平山^{たや}_榎のが筆のすさびになる字引語釈であつて、文化十年(一八一三)の序文奥書があり、明治四十年頃は完備物が平山家後裔に保存されてあつた所、経緯は知らず、原書所有権は川本^{かわもと}_達氏が物故された今は同家方吉氏に属する。(3) 秘藏物なので九大へ郵送して副本を作る事も望めない次第である。

原書は全二十卷あつたが今や計十卷しか伝らず、それも本編は二卷宛合本となつて計十二冊内六冊現存と云ふ実情。各卷枚数と語句数とは左の通り。

卷一(序文二枚と五十枚)百八十三語句

卷二(五十二枚)三百十七語句

卷三(佚)

卷四（佚）

卷五（五十枚）百五十七語句

卷六（四十九枚）百六十五語句

卷七（佚）

卷八（佚）

卷九（佚）

卷十（佚）

卷十一（四十四枚）百七十五語句

卷十二（三十九枚）百二十五語句

卷十三（佚）

卷十四（佚）

卷十五（五十一枚）百四十三語句

卷十六（五十枚）百六十五語句（跋二枚）

続編上（佚）

続編下（六十四枚）百九十六語句

殘編上（佚）

殘編下（五十九枚）二百七語句（跋一枚）

各卷の表紙は鼠色反古紙を五枚合せ糊附してあり、表題を書いたものは二冊だけ、各巻とも綴糸は紺色綿製二本宛、袋綴半紙は黒罫九行で丁付は無い。内容は五十音や伊呂波の順序も物類品目の区別もなく雑然筆録された雅俗語句であつて、引用書は和漢約三百六十種、大抵漢字仮名交りの標語は三分位を隔てて下に同大難読草体文字で註釈されてある。残存総計千八百三十三語句中から予て滝山翁が対馬方言として抄出されておいた約二百七十箇を標語は仮名に改め五十音順に配して更に不適格物を篩い落して紹介する。(4) 【内は紹介者が翁に質し、又は翁が当初から添へられた説明文である。

初に首卷序文から掲げる（「」は改行符）。

道速振神代の言の葉は却て天離夷に遺りしこと多」とかや卑と思ふ語も誰昔いひ初し人ありていかにも訳「有事なんある覽偏に笑なかし徂徠のいひけるには古」の詞は田舎に残れり都会の地には時代のはや」り詞といふもの出来て古わ皆かわり行に田舎人わ頑にして「昔を改めぬなり頃日は田舎人も都に來りて時の詞を

習ひ「つゝ行て田舎の詞もよきに替りたると言ふわあしきにかわり」たる成へしと録しきさもあらんかし寂
ての折しも古今「集をば見けるに何をして身のいたづらに老ぬらん年」のおもわんことぞやさしきと詠歌を
載らる熱想へば我こそ「かくなんありぬ覽と心めづり及なき井の蛙なれど」何かわせんと心芽生国の詠訛り
ども見聞しことに譬「蛇にも懼すいとも拙キうへ禿にし筆を染側なる反古に」書留て子や孫に便りす蟹わ甲に
似せて穴を穿と「かやされば名ばかりの陰陽師とひとしく中ルもありあたらしさるも多からめ当らざるは猶占
て訂せかしおもひ出の」儘なれば譬も説も野語も道戯も混淆八の冊とは成しと好々わ「かで綴りぬれば芥草
とは名づける深山の片葉大」海の一漚なれど又補にもならんかし

文化癸酉彌生日

海隅ノ拙翁東山明允夫寶古堂に書ス

序文末行の次行には五寸角の朱印が三箇あり、上は右に「平山」左に「渠」とあり、中は右に「東」左に「谷」そ
して下は右「圃」左「允」の字が見える。

あいもの

は利合物なるか太平記にあひものつみたる船とあるも此事なん【合ひ物は塩魚】

あがりかひごのやう

蚕の蛹の繭を作らんとする比ほひをあがり蚕といふ【人の病み抜いて菜色を呈したる

をいふ。対馬にては蚕をカイザといふ】

あたまにきりあがる

人にあやなされて頂氣に乗り自らをゑらいものゝやうに考へたる人

あたまのぎりぎりからものをいふ

かりあがりたる人の高くものをいふを云ふ【かりあがりは逆上の意】

あつたら人

アツラヒト
可憎人なり

あてくりかやす

物を手にて翻覆ヒルガヘシクワガヘスすること

あとくちなほし

物を食ひ口中悪くして他品を以て改むをいふこれ口を嗽ぐなり

あなぐりせなぐり

モトメサガス
は素搜モトメサガスの字か【隅々までも搜索すること】

あびき

潮の漸々さし来るをあびきといふ此の如き思ひ掛けなき方に当り来るをいひ又干るかと思へば満ち

来るが如くにて返報のあるにもいへり左伝に云く波及

あぶないせまとほす

アブナイセ
浮雲瀬アブナイセを通す

あみあがり

網揚物の尽果又は事済みて如何んともすべき術なきの俗諺

あめがそばゆる

ソバフルアメ
は微降雨又小濡の転語ならめ

あめふりのはとりのやうに

人の姿のしよぼしなきことを云ふ鶏雨に濡れて毛起らず勢を失へる良にとる

いぼはしわたれ

イボイ
疣イボイを落す厭当の言葉とす人に移す意あり憎むべし

いまげえんこつちやねえ

近來の事にて無しといふを今げゑのこつちやねへと云今げゑは今の代なるへし

いらつく

いらいらするは心の急なるを云譬イラツクば苛イラツクの刺ツクにてさゝれしがごとくやるかたなきなり心を苛イラツクの苛は

怒る心あるなり

いろ

喪ある者の服を素^イ褌^ハといふいろの称は倚^イ廬^ハ字彙ニ倚廬ハ喪舎也とありに居服といふ事成べし【葬式に服する白衣】

うきよくもすけ

どこにても行宿りて宿所を定めぬをいふ

うちみじやく

塾^{シツ}をいふ【打碎く】

うつとうされ

氣を失ひし如くしてゐる人朝鮮語にて人をさるむといふされはさるむの転語なり

うはまえとり

運上の十分一を取るを抽^{ウキ}豊^{ヘイ}と云は此心より出でしなるべし

うらせど

宅地の裏辺といふことをうらせどといふ裏瀬戸なり

うらみこいなふ

怨もこいも無い人如在なきをいふ

えびす

器の蓋等を開く時えびすといふ夷神は福神にて幸を与ふる神なれば此中福^イあれといふことならん

【福は幸と読ますならん】

おうおうにぜにいらす

人のものをいふに忤^{ウカフ}ふることなく応々と答へてをると云意俗に云ふ口上のみにて錢

金の入らぬ事といふが如し

あふぎはやぶつてへたとはいはれる

扇は破つて下手とは云はれる譬は舞人の中啓も破るる程に舞踏力の及

ぶ限りなしたるをも其芸業の善は褒めず却て未練といふが如き人心胆を碎き一功を立てし事有ても其功を賞せずして惡しき如くおもふこと多し是人を賤しんじて我慢する愚人なればなり如此なれば懲りてなすものなからん

おふたこよりだいたこ 身近くにある者を寵愛すると云ふの諺

おほてえなひと ゆりやかなる人をおふてゑなと云ふ大学に所謂心広体胖か也の意にて大体なるか

わうばんげえな 魚菜の大刻みなるを碗飯料理と云【客人の数に応じぬほどに並み外れた献立をすること】

おうぶる 物におふぶる又は思ひおふぶりをぶる杯といふ応ぜざるをいふ【為し遂げ能はぬなり、例今日

は仕事が多くて日一杯に遣り切れずおうぶりました】

おさきのこどら 小児の遊戲なり其掛合の辞に御先の子等云々といふ【子取ろ子取ろの遊戲】

おはらひさま 御稜とは伊勢神宮にて数度の禊を修し祈禱せし守符と云ふことにて玉串箱なり

おびところむね 衣服を着て帶せざるを帶解きひろげといふ

をんざのはつもん 果実蔬菜類の無くなる時季に珍らしくも残りたるもの遠残の初物なり

おんたうな おんとうなは温臆なり字彙に以下人ノ性ノ不爽利者上ニ温臆ニ云フ【人の好い】

およおよ 少く物に驚くをおよおよと云臆々か

おろす 人の事を悪しくいふをおろすといふ褒貶の貶なるべし去ればおろすは貶の転語ならん

をばいか 姨にあらず芒烏賊なり芒の穂に出でし比出づる魚なり【今云ふ所の二番烏賊に当る】

かがそう 斯為たらば可なるべきか悪しかるべきかと屈せるかどそふと云世話字如何成にや【躊躇ふ】

かがる 爪にてかがるといふはかきさくなり

かきだし 懸売の品々を帳面より抜いて書き出しやるの謂ならん【売りたる物品の勘定書】

がきとうされ 幼穉の者を貶して餓鬼童されといふ朝鮮語にて人の字をされといふされはさるみの転語なり

かげんほうこう 内証にて各別骨を折れども人其功を知らざるをいふ【影の奉公なり】

がぜになる 幼児或は猫の児等を頻にもてあつかへばがぜになるといふがぜは カシエル 悴にて此略語なり

かてつませつ かつてはかつてにて物を交へたること則ち 雑 字なり 文選に鷲良雑とあり史記には縹の字をかてると讀せたり

がんまくな 兒童の強勢なるをがんまくな者或はがんまくなといふ是は織田信長公の履奴に美濃国出生の者に

て市若といふ者あり彼が異名を岩鷲 ガシヤ といふ其猝暴なるに取て通称とす今は小児のみに限らず成人にもいふ也【荒々し。自分の力を計らず多くのことを一時に成し遂げんとあせるをがんまくな人といふ】

がんがとびやはともとぶ 雁鳥が飛べば鳩も飛ぶ鴻雁翔り飛べば鳩も亦是を見て舞飛が如く人真似するの喩

かやくり 機振 カラクリ の訛也

きがしよぎしよぎする 心援 イソガシ 開きを氣がしよぎしよぎするといふ冗 シヨフキ 気々々か冗 イソガシキ は閑なり【いらだつ】

きなくさい 絹紙等の火に焼焦るる香をきんにやくさしといふ

きやらもたかねばへもひらず 伽羅も焼かねば屁も放らず何の香も無き意にて何とも無しと云ふ諺

ぎやうさん ぎやうに 物の多きをぎやうさんなといひ又はぎやうに杯といふ顯山か顯は物の大成を云詩

經ニ其大ナルヲ有シ顯タル注ニ顯ハ大也

きやうまき 指の文をいふ即 テイヤ 渦【原字扁は月】也若くは經卷の紐を卷しにとりて名とするか

きんぶるひ 懷 シツキ 客人を指て絹飾と云目織くして粉出兼るが如きに喩ふ物を貯へて出さざるなり

くじなむ

我がなす筈の事あるに人数あれば誰がなすべきぞと思ひて動かず頻に勞を他人に譲らんと欲する

こゝろ

くじる

目を挟る鼻をくじる穿【原字穴に乙】の字か

くちうらがわるい

口占とは人の詞の善惡をいふ

くちつぼめる

人に無心をいひ或は淫らをいふの顔に人に口つぼめると云ふ

くちにあがる

言行一致せず言葉計也行はならず口もおさむることを得ずして頻にいふが故上ると云中略自負

驕慢の者多弁なるにもいひて稍博し

ぐのみ

うのみにぐつとやりし杯書てあり【ぐのみは鵜呑の転訛なり】

くんちくりめしはらはりさける

九日栗飯腹はりさける九日とは重陽をいふ中略くんと呼ぶものは十九廿九日

といふごとく九の音屈詰する故人と懃【ハネ】たるなり和漢三才図会に栗を食ふ別意なし只時の果なりと

いへり思ふに秋の穀物菜蔬の能実れるに従つて心の儘に飽食し胃に満て割るが如きの謂是穀菜豊なる故

楊腹キナシの者なきを祝ひし戲言成かし

くわいつく

氣の寛き人をくわいとした又潤達なと云氣寛くして惜みなく金錢を遣ひ浪費するをいふ

くわしや

魍魎魍魎の類なり死人を墓に送るの時驟雨起り黒雲覆て昧蒙たりし時などを火車に捕はれたと云

くはずひんらく

食はず貧樂貧うして飲食心に従はざるの謂飲食せんと欲すれば又苦を生すれとも其苦なき

が故樂し云々

けせつ を云ひ掛る化説か寃の事なり【難題云ふ】

けち けちなは怪事なり

けてえな 惡む詞 化体なるか【怪体なの転ならん又は氣態なるか不満に堪へぬ時などに「けてえんわりい」

などといふ】

けぬきあはせ 鐸ケヌキにて額を抜くを際キス拔と云髮際ヘキスを拔ばなり

けぶな けぶなこと杯といふは希有キウの事なり

けがけれつな 怪異ケイ戯列ケレツか【きてれつに同じ】

けんきやうづく けんきやうは健強か又狷強なるにやけんきやう馬けんきやう蚯蚓も同じ成べし

こくしやうに 味噌汁に酒を加へて魚肉をよく煮たるをこくしやうに煮といふ

こつばら こつはらといふは櫨グ【原字木扁に愚】の木の皮を剝て長さ六七寸計にも切半上を紙にて左卷し松

煙にて燻べ正月の半に用う

こつばらまくやうに 物を手易く言為するをこつばら巻くやうにといふこつばらを巻くが如く撓挑グ巻しまふ

心なるべし去ればこつばらといふこと詳ならず小櫨【原字木扁に愚】の転か又は子孕の訛語か所謂粥杖の
異名異制なるべし

このみかやのみたべるいろがあつても 木の実草の実なり かつれてもといふ意【いろは場合の意、かつれ

ては飢えて】

こぶろ 腓コブをいふ こむらの転なり

こぶねににがすぎる

身に应ぜざるを小舟に荷が過ぎるといふ

こんがうからひ

衣服を着て背少し僕み然も物を負ひし形をいふ略駝背

ごり

浜土の訛 水の底に淀みたるごみなり

さあまあ

早間か【感嘆詞、サアマアその儘にして下されませ等云ふ】

さけをわる

譬ば上酒二合に其次なる酒一合調合せしをいふ一物を割て又水杯を加へて升合を増すをくづす

ともいふ其性を類すなり

さざえぶく

殻を螺螄ぶくといふ恐らくは服にや【螺螄は字序が逆】

さるのもちかひ

猿の餅買ひは物を手より手に替へ替へすることをいふ朝三暮四の異語か

しこぶつな

醜物 醜きまでに肥満せる人又物【品の特に不格好なものをしこぶつなといふ】

しちなんくやく

世の諺に七難九阨と云ふて七の歳と九の歳と遇へば災ありと云ふ

しちまんいふ

七万八万云ふとは多言を云ふなり

しやくしまひ

始めて見し事あるか或は始めてなしし事ありし時杓子舞するといふ杓子を執て舞事ありとは

聞けとも其謂れを知らず云々

じやれえ

左礼戲ザレなザレの転語なり【児供の遊戲なる「むくろなげ」などを賭にせずして仮りになすをじやれえ

にするといふ】

じうこうな

高慢言ふをじうかういふといふ肉好ニクカウなるか

じゆるい 道の泥濘ヌルカミをいふ濕地シツチの訛か冬の谷風コチカゼをじゆる東風ゴウフウなどいふ云々

ぜうに 田舎の者は多き事をぜうにと云饒ニギハヤヒ也饒ニギハヤヒ説文に云飽也一に云多也、物多き事をぜうにと云は此字也或

は穰シロの字をも用べし

じよさいのねえ 有の儘なる人を如をもねえ人といふ

しよんしよん 愛子をしよん或はしよんしよん又はしよん子と云ふしよんは鐘の唐音鐘愛の意なり【しよん

さまは他家の男兒女兒への敬称】

しらがふつけえなる 白髪ふつきになる【白髪許りになる、ふつきは富貴か】

しらくちたたく 無益のことを頻に云ふを云ふしらは白にて色なき意か

しらた 穀物菜蔬の種実いらぬをいふ秕シヅの訛か【穀菜の実入らざるをいふの外又白痴の人をいふ】

しりがうじよつく 尻がうじよつく或は尻をうじよつかすといふ是他行を思ひ或は帰らんと思ふて尻を動か

す意】

しりからげる 食物の食ひ足らずして半にて尽きんとするをしりからげようにあるといふ

しりくへくわんのん 尻喰へ観音人に背き罵るを尻喰へ観音といふ

しはすごう 十二月に至れば正月用の魚類を積て往くを四極がうといふががうは行なるか又買か業か

すいかぜ 鯨スエより吹入るゝ風スエ 缺カケの訛言也

すいきん 甑シロにて物を蒸すに布を敷之をすいきんといふ則炊巾なり

すいくる 斜に行くなり

すけおとす 物の定り居けるを謀り破りて己がためにするをいふ

すけすけ 一足にて走るをすけくといふ

すつこむ 疎籠なり【引籠む】

すねきりだいく 粗工を貶していふの俗諺

ずらぼん 捕へ所のなき人をいふ俗語

せえご 最期^{サイゴ}の転なり目に掛つたがせえご

ぜぜる 舌相滞て言語正しからざるをぜぜるといふ^{ゼゼル}鼻の略語

せんぐわんのかたにたこのかさいちまい 千貫返すべき所へたこの笠一枚にて済るが如く百分の一にも当ら

ざる返銀をいふ筍^{タケコ}【原字は竹冠に若】笠^{かさ}を州俗たこの笠と云【又筍笠^{タケコ}のことを「たこんばち」とも

いふ】

そこなし 酒食に方量なきを底無といふ

そつけた 譬ば人の寒きといへば暑しといひ堅しといへば軟かなりといふの類にて齟齬せしことをいふ云々

そばばちくらふ 譬ば人の喧嘩をさかへんとして計らず傷つけらるゝもあるべし又己に咎なきに人に呵ら

るゝの時不図加へらるも有べし何れ此類多からめ去は側罰^{ソババチ}ならんか【さかえるは仲裁する、留める】

だいこんなり 萊菔^{ダイコン}形始めはいさぎよくして次第に劣るをいふ

だだくさ ダダクサ は懦弱乱雜を云、懦弱なるか

だんべえのよき ダンベエ だんべへのよき杯いふは坦平なるべし、又のだんびらもんも坦平物ならん

ちばける チバケル ものを問ふに訴て有のまゝにいはず色々にいひまぎらすをいふ【イツハリの字に訴の字を以て

せられたるは詐の誤ならんか】

ちやたう チヤタウ 先祖の靈【原字はヨの下へ大】に煎茶を奠ふるを俗茶湯と云茶と湯とは別なり云々

ちやねばうず チヤネバウズ 茶道坊主をさすちやねのね分らず思ふに茶奴か

ちやびらくち チヤビラクチ 虺はまむしの一名毒蛇なり地扁蛇の黄黒にして蝸の如くなるに星あるを茶ひらくちといふ

虺喰へば刺忽ち上りて目眇大に痛み甚しきは往々死に至る【人の陰秘を發き惡しざまにこれを罵るを常と

したる如き人のことを茶虺といひて人に恐れらる】

ちゆうちゆうさざえ チュウチュウサザエ 蠚螺の子をいふ

てうぶ テウブ がよいわるいといふ塩梅并に煮加減のよきをてうぶがよいと云調味か又調美も然るべし

ちよつけえ チヨツケエ 箸じか シラウライ ちよつけえはちよつかいの音便 為さいでもよきことを差し出でて為すをちよつけえ

だすといふ

つくぼむ ツクボム 蹲踞なり

つばねる ツバネル 徹梨を治るをつばねるといふ

つぶしのさら ヒサカサ 膝蓋

つめがくう 手足の爪がくう寒気に凍え疼痛なりくうといふは疼事咀食か如きを以てなるべし

てきてえ 和せざるものを敵対といふてえはたいの訛音

てつくつとる 手つくつてをる何もせず又手て居るをいふ

てつちようぬどり 箕踞の足を屈めたるをてちやういどりといふ亭長座せし如きにて老人の居座するならん

【ぬどりは安座、あぐらかく】

てまへをりかみ 手前折紙及ばずして自負するをいふ

てんぐるま 肩に跨がらせ頭に取つかするをてんぐるまに乗すといふ 世話字未見す狂言に鈍太郎殿の手車

あり此辺に取るものか

とうろくざゑ 黒白も分らぬ人を罵てとふろくざゑといふ【現代音はザエでもズエでもなくズエエ】

ときのたいしやうひのたいしやう 時の大將日の大將たとへば賢人にも用ゐられねば善ことをいひても用

るものなく愚人にても時代に用らるれば其白癡の指揮に従が如く其時其日の威勢ある人をいふ

とつつまいつ 起舎なり【物を調べるに思案に暮れ極りが付かず取つては見卷いては見するといふ意なら

んか果して如何にや】

とりかち 多慾にして好て賄賂を受くる者を取梃といふ

とわたりばなし とりゑのなき話をいふ鳥渡なるか又渡渉りにや世話字戸当あれども物をかけての事と見え

たれば是と異か

なごなひと 柔和なる人をなごな人と云

ななしのとふざぶらう とふばぼうと相同じ【児供同士の間に名を問はれしに對しおれは名無しの藤三郎ぢ

やといひてからかふ】

にいじんのんでくびくる 人參服して縊る 人參は良藥なれども少きが故価甚高し彼良藥を多く服して偶

本復すれども其直を弁ふべき道無きを以てくびれて死するをいふ

ぬらぬら 物事に緩々したるをいふ

ぬるい 鈍き人を遅人といふ

ねばしわたてくびしめる 物を急に云はずしてじわじわといひ詰むることねばしにてしむるが如く強くなく

して自然々々にしまる心【粘綿は眞綿なり】

ねんがら 根柄打つ【尖り棒を地中に投げて立て他の棒を倒す遊戲】

のぶといやつ 大胆者にて鈍太箭なり

ばあいや 小兒人を颯り又辱しむるにばあいや成はばいやくなどいふ文字未考

ばくりよう 人の中入するを博勞するといふ【ばくりようは博勞の転訛なり】

はざみ 戸障子等の透間より窺ひ視るをはざみといふ

はしりごくろふ 奔区なり梵網經には行拭と書けり【はしりくらべ。はしりこくら。におなじ】

はずくひもいしやう 管杖如きものにも衣裳を懸ければ能く見えるみなりのよからざる人にも美服を纏

ひ飾れば見違へる程よく見える【長き丸太材を地に打込み竹を掛け渡し以て衣類を乾すに用うるものを管パイプ杖ジョウといふ】

はちわれる 器物の破るをいふ八割ならんか

ばつば 小兒烟草をばつばといふ蝨人烟草を日本へ持来し時船主の名をばつばといひしとかやこれを伝へて童子烟草の称とす

はてのはつか 極月の廿日を云はては終ハツなり又畢同じ一歳の廿日の終りといふことなり【即ち一年中の最終の二十日をいひ幕政時代死刑者を是日に処刑せしといふ「又畢同じ」とあるは「又畢の字もこれに同じ」といへる意ならんか】

ばぼう 兄をばぼうと云町人囊に云破茅成べきか【「ばぼう」なるべきを平山先生は「ばぼう」に作られたり下男のことを「ばぼう」といひたるも又旧藩に士族の子弟を敬して「ばぼうさま」と云ひたり又「ばぼうちやう」といへば兄丈といへることなり】

はんじよう 産をはんじようと云誕生の訛か強ていはゞ判生又繁昌なるべし子孫繁昌に取しならん

ばんぞうする 売買の中に入て彼是取扱をばんぞふにん或はばんぞふする抔いふ【「ばんぞう」の世話字詳かならず人と人との中に入りて双方よきやうに口入を為すこと】

ばらもん 身行正しからざる人をばらもんといふ恐らくは婆羅門か
ひきなき 頭の頂チヤウツツ辻をいふ

ひこずりまはす

拏ヒツツ攫ツツ廻ヘスならん【引摺豆腐ヒコベイトウは木芽味噌に茹豆腐を和して作るこれは聊か参考として附記す】

ひつかがみ

ひつかゞみ臍ハナひがみなり臍ハナをひつかがみと云

ひとまねこまねからすのこまね

小児が己が友のひとまねをするを人真似こまね鴉の子真似と云ふ慈鳥ヒナの戯

脯するの比親鳥鳴けば声未だ出ざるに己も亦嘴を開け其啼真似するなり為イナれ共もとよりあたはざれば益な

し諺これに拠れり

ひなだぶつくり

日ヒ南北ナンボク向ムカの訛なり

ひならしい

香車キヤン成人を指てひならしいといふ

ひんしり

肘ヒデシ也肘後ひちしりの訛なるべし

ひやいほがでる

冷疣瘡ヒヤイホが發た恐怖たる時に云強き風に当り毛孔が立つて鳥肌になりたるを冷肌が出たとい

ふ。寒さの余り又怖しさの余りに出る

ぶゑん

鯽魚ナギイを無塩フエシの物と云【不沙汰して居つて久しぶりに見舞に行くを「ぶゑんみまひ」といふ】

ふかがくた

衣服の敗れたるを鱧魚フカが喰たさうなと云ふ、わた出たるといふ隱語俗 鯛ウオハシを略してわたとい

へば梨ウツと鯛ウツと音同きがゆゑなり

ふたあしふむ

両足履フタアシ 両端フタヘを持するの謂なり喩は右足は行んと欲して進め左足は留らんと欲して退き一に

決する心なし云々

ふてる

ふてり顔フテリは腰面フツツの略語か

べえたもん 売女ベイメの訛り夜發ヤボクの謂彼が如き淫行の女をいふ

へしぐそかくる 人のいふこと毎に押厭オシヅメするをへしぐそかくるといふ【をしへしは反対する事、通俗には

「へちぐそかける」といへう】

へつる 木などをへつつて取は日本紀に書ける折ヘツルの字ならんか

へんてつもない 何のへんてつもないは無福綴なり福綴は衣服の制福衿の事にて僧の單衣なり

ほうじよあかず 方処不明か東西を知らざるの謂ひ【埒アチの明かぬとの謂ひなり】

はふずる 衣服等を曳くをほふずると云匍匐フフ心に取るか【着物の長け長くして其裾が地べたに垂れたるを曳

き廻はすこと「ほうずる」は這摺の転なるべし 世の中をのらくらと勝手氣儘に浮かれ廻ホウはるをほふずり

まはるといふ】

ほか 空虚クウキョをさしてほかといふ

ぼち 餅モチの訛小兒或は郷人等かくいへりもとは横音通すればぼちといつても通すること有んか【児供に対し

て餅を「ぼち」といふ】

ほねかぶり 葬礼の手伝に行をいふ

ぼんのくぼがすいた 衰へ弱りたる人を指していふ

まつぷくら は眞豊マツトヨなり最中なり【まつぷくろともいふ眞壺或は凶星といふにおなじ】

まどとひ 鶏の非時鳴を宵鳴又まどといひ中略暮より酉の刻迄を宵啼と云盜鳴に当り夜暉ヤヒて鳴をまどといひ

と云ひ不祥とす所謂荒鷄に当れり【鷄の時ならぬ時に鳴くをまどとひといい御幣担ぎはこれを火に立つといふて恐れる】

まんがまれか 万が希なり

まる 小児ゆばりするを尿うまるといふ又成人も小便せうべんまるなどといふは日本紀にゆばりするをゆばりまる大便するをくそまると訓訳あるより出し古語なり三代実録くそまると訓たり

みじけ 継病なりみごじけ又はおとみつはりと訓む医書に又魅み魅病みびょうとす

みとほしのはふぬん 見通しの法印 法印は僧の官位医師亦これに任ず見通とは医緩が晉の景公の病の膏盲

に在りしを知るが如く又寛和帝の逃れて夜花山に御幸成しを晴明天文を見て知るが如く少も違事なし是等よりして能察知して違の無きに取ていふ【先見の明ある人をいふ】

みなひらひにゆく 小児の尿せるを蝸ミナ羸ナ拾ひに行くといふ

むかしじつとあつたげなら 昔じつとあつたげな【昔漸をなす時の冒頭発語なり今は昔といふにおなじ】

むざと 無差ムサと肌のゆるされぬ人譬ば蛇腹蛇ヘビハラクダを生殺しにしたる如き人と底心に毒の有る人とは眞綿に針を包

たるが如く無差肌の免れぬ人なり是虎の子を抱て寝が如し用心すへし

むすび 細く断し紙に男女の名をしるし絶つぎて結合せ暗に合ふを以て戯とす

むなぐらをとる 服の襟を抓むをむなぐら捕といふむなは胸前のことなれば曾なるべし膿うみを俗にほとくら

或はふつくらといふことの如くならん

むねがしはる ムネシハラシ 胸疾 ムネシハラシ 【胃中に飲食物が停滞する】

むらさきぎも 紫肝 五月五日に生れし男子三月三日に生れし女子紫肝色にして分けて河童好て拔食ふと云

下学集に云五月ノ子不養へ五月ノ子へ必害ニ父母ニ云 【多くの人の中に稀れに紫肝の人ありてその類の人が河童に肝を抜かれるとの迷信あり】

めがつつく 人のなすことの我心の如きに無をいふ

めのてんはくちにある 目の点は口にある眠むたき時食事をすれば目覚るをいふ

もうもうどき 暮方を王莽時と云もうもう時とは訛なり羅山文集ニ云和俗称ニ黄昏ヲ曰フ王莽時ト言フハ晝へ前

漢也夜へ後漢也以ニ日氣已ニ没夜氣未一サルヲレ萌故也然レハ則名ニフル王莽時ト当レハ哉 【化物の出る時刻として子供の外出を戒める】

もえらかす は萌出る意に拠りし語ならん

もがる 氣を遣ふを心をもがると云

もじやもじやする もやつく心なり氣の屈鬱するにもいふ

もづく 海藻【海藻の新芽、淪いて酢醬油に浸し食膳に供す】

やになく 彌惡【人に惡くたらしくいふこと】

やまたてる 輻過るの路に神社有れば山茶の葉を挾立て不淨を避く是を山たてると云ふ

ゆうし 啞子をいふと云分らず瘡癰の転ぜしものならん

ゆびきりかまきり

子供が遊戲中何か約束をなし間違はぬと云事を誓ふ時に用うる詞なり

ゆめすけ

夢助物を聞ずして知らざるを夢助といふ中夢幻の如く知らずしてゐると云事助は語の助けなり

よたれる

草臥たる躰にてぐつさりとして居をよたれるといふ忪なるか

りつこぶ

臍と腕とを屈して氣を詰れば肘上に一肉憤起これを力瘤といふ

わざくら

態々といふ事なり

わたくしごと

水痘

以上此処へ出したのは計二百余語句である。次に卷十六の跋文を掲げる。

難^イ哉俗中や春の日の穀^カの恩^スを送らんと心を墨に「艷^ス碎^スき思を紙にめつた述筆を憑に躡書^ニ熟^ツ」開けば正味とやらんは知ずして悉く皆糟粕ばかり難^イ此世の中客^ヤあり書案を搜り觀ていゑり愚なるかな「翁^ヲ倭文^カの出干葉^アもしらであとやさき成分りもせぬ」無他ことを雁飛ば秦龜^イもじたんだしかもめつたに大^ヤ「倭^ト唐土^モの文字を書果して塗桶に蛤の笑をとらん」そこでいゑらく伊呂波で長く假名廻しとやらも最知^イず「明魏^ナかかたひがみにならふに非ず只々身の拙きに懲果節用集を師にくり索め子^コ」孫に一文^{ヒト}字にても便りすの志し豈^ナ河豚^ニを問んと正^ナ」字じやとて遠^ニき蛙^イの字お書て毒に中られ鰈魚^ナを「買んと鮎^ナの字を書^キ」鱗^ウを得て魚^ウ買^ウとはりあへ」とにはあらず款冬^ヤ杜若^カ棒萩^ハの類も通用す世話^ナ」字がよしといゑばいかな赤間^カ関^イの硬石も藥研にし下^シ」手の齒染しように奈良油煙で唇^ツを塗廻^マす於戲子^ア」末^ハの歳にわあらずや頻に紙を書潰^ツし鼈^イの鬚^ヒわ只腐^ク」れ筆の帽管塚とせん

されど井の蛙の^{ミヅカメ}見をも破ら「す夏の虫の疑を^{ウタガハシ}釈にもあらず酒店の粕は食す」して他の糟を喫て酔樂む愚なるかな翁と笑ふ」辞もひぬ間に軒端の鴉もしたおとかひに^{アザケ}啞方「と嘲啼は筆をこれぎりに^{ナゲウ}投ち考えたゞして清書」するの志も消失、草案の儘に側なる古筐に^イ藏て^シ蠹魚の室居になんなれと名残に跋す

最後に続編下の跋文

絵心のなき藥取の眠を覺さす便りにもいと」ならず雜混寢の夜留守居するものゝ欠の「蓋とする術にも猶ならずされど突戯とかは」りし日暮しなれば書綴りたりとて虞氏が「如き咎は有まじ素り清紫の糞のかざも」すべきよふは無れども闇夜に一星の助も得「たき癖たへするより思出を訊ば癡漢」が始りと晒わるれど饒より酒より旨くして「石上和平か命毛絶し燒銘を以めつたせぎに」せぎ遂に數葉を費す世の人は不用の物なりせど拙世を終ふる後までも御免なれ蠹」魚どの鼠どの

東山 □

右最後の□は朱印であるが字体は不鮮明で判読し難い。⑤

因に紹介者は九州方言において此種資料の捜査も発表も是を以て終止符を打ち度い意嚮である。

註

- 1 昭和廿四年四月廿九日朝八時博多港発二泊「春の島巡り」の広告が丁度数日前に福岡市の岩田屋百貨店東出口（西鉄福大線終点）で眼に入り、多年待望の機縁逸す可からずと極近くの西日本新聞社事業局へ申込み、結局対島班参加に決めて折好く持合せの会費千四百円を払つて了つた。金曜出帆ではあつたが天候もよく参加条件の弁当一食の外に白米九合持参も

困らなかつたので、わざと百円札数枚のみを懷にして輕装乗船した。天長節から憲法記念日へ掛けての連統祭休日を狙つたのに博多松囃子直前と全国的金詰りが崇つたか、各五十名宛募集が同じく同船出發二泊予定の沓岐班は約廿名、対馬班は卅名弱であつた。八百三十噸の大衆丸で海上は絶好日和、午後四時嚴原町着、直に賀島由己氏の案内で宗家菩提寺なる鐘碧山万松院(八十余歳住職加納貫道師)見物、二組に分れた旅館の夕食後は八幡宮神社へ一同參集して器用な土地児某氏の対州節を三味線伴奏で聞いた。翌三十日は樽ヶ浜迄バス、午後の雨を冒して浅海湾舟遊に終り、翌五月一日はバス盟休の爲に、対州馬とカス巻位の外は現代化甚しい府中と異り女は髪長く紺の繼合せを着た郷土色濃き豆酸訪問も断念して、自分は一行の半と共に予定通り朝七時半発の阿多田丸二百八十噸へ乗組んだ。併し当初の日程を急変して乏しい財布へ頻に觸つては、一泊旅賃とバス代さへ頗る心配しつゝも思ひ切つて沓岐北端の勝本へ十時着と共に單獨下船(恰も沓岐班は予定の如く此処で同船へ乗組んで歸路につく所)、バスで南端郷浦へ午後一時着、運よく終点で会へた目良龜久氏の東道で武生水町東觸の是亦初見參の山口麻太郎氏(刀江書院の藤岡勝次博士等「言語誌叢刊」昭和五年七月「沓岐島方言集」同十二年二月「続沓岐島方言集」の著者)御留守宅へ名刺を置き、一泊二食并当四百円米向持宿を定めてから夜道数町を山口氏を再訪問(本島も夜十一時から電気は点かない)。翌二日東海岸の蘆辺から午前十時に大衆丸乗船、快晴の海原を滑つて午後二時博多港着、無事十数年來の宿願を果した。

所で折角の対州行に何か言語關係古書(それも朝鮮語ならざる)の一つ位は土産代りに探り当てられぬものかと考へてゐたがやはり無駄ではなかつた。それは九大国文学研究室へ最初から揃へた中央公論社刊の柳田国男氏編「全国方言集」の最近刊第七なる瀧山政太郎氏著「対馬南部方言集」昭和十九年九月二千部が太平洋戦争酣の爲今迄入手出來ずにゐた所を山口麻太郎氏から同家の沓岐民俗研究所藏本を拜借して帰福後一覽し得た実情にある。で同書の序三頁に見える『日暮芥草』は本村毅氏編『九州風土記』昭和二十二年九月(久留米市の金文堂刊)の「九州と方言」一二〇頁には当然登錄されて

2 ある可きに洩らされた不運さを託ちつゝ、未見の滝山八十五歳翁（慶応二年生で八幡宮神社氏子総代）へ通信連絡した。

長崎縣教育会对馬部会『対馬人物誌』大正六年五月の三四〇―四頁に由ると、平山次郎左衛門、名は柴、字は明允、初め龍貞、後に戯水と号し又東山と曰ひ、後改めて鳥樂と号す。土田平治直行の四子、母は丸島氏、宝暦十二年（一七六二）四月十二日を以て対馬府中に生る。安永二年二月儒臣満山雷夏の門に学び、九年五月筮仕文庫役を命ぜらる。天明元年六月將軍徳川家齊の立儲使都船主を命ぜられ朝鮮に抵る。寛政十二年五月郡宰に任ぜらる。文化三年正月朝鮮通信使易地の事を以て幕吏監官土屋帶刀、會計松山惣右衛門等來れるを以て郡宰として隨行、帶刀山川地理社寺名勝人事の變遷を諮ふ。其見聞する所を以て答へ、帶刀命するに對馬地理編修の事を以てす、大學頭林衡も亦賛同、六年十二月津島紀事成り幕府に上る。八年五月朝鮮通信使來聘に當り輦旋最も努め其功を賞せらる。十三年（一八一六）二月二十六日歿す、享年五十四。津江氏を娶る、子なしがその略歴である。又對馬教育会『對馬島誌』昭和三年七月の一七二―三頁參照。因に文化六年序『津島紀事』稿本十一卷附錄一卷の原物は八幡宮神社に所藏されてある。

3 昭和廿五年七八月の入学会連合對馬共同調査七十七人の言語學班に加里自分が再度嚴原を踏んだ時、川本家で原物を手にするを得た。

4 原書には勿論仮名遣ひがあるが是はなるべく元の儘に示し、送仮名（翁の所謂捨仮名）は可なり缺除してゐるので此の方は補筆されたと云ふ。又翁が抄出されぬ部分にも幾多地方味豊かな府中嚴原言語資料の殘存する事は勿論想像される。因に物類別にした『對馬南部方言集』（実は嚴原方言集）二千二百語句には原書抄出物も可なり利用混入されてあると云ふ。

5 続編下跋文最後の「せぐ」は「讓る」意。